

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

# RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

http://www.kwansei.ac.jp/c\_rcc/ TEL:0798-54-6019

RCC 講演会報告 二〇一六年二月二八日

「キリスト教とジェンダーの過去・現在・未来：聖書学から」

講師 山口 里子 日本ラエミニスト神学・宣教センター共同ディレクター



関西学院には、二〇一四年に院長名で出された、「インクルーシブ・コミュニティの構築に向けて」と題された宣言文がある。宣言文では人々の「性別、年齢、国籍、人種、民族、出身地、主たる言語、宗教・信仰、身体的・精神的特徴、セクシュアリティ」等の違いを尊重して、多様性の豊かさを育むコミュニティ形成が謳われている。またこの宣言文に関連して、過去三年間にわたり学生の自主的な企画

として「レインボー・ウィーク」が開催され、LGBTに関連した活動を行なっている。今回の講演会では、関学の「文化」となっている「多様性の尊重」について、聖書学の分野から、特にジェンダーの問題としての「LGBT」に焦点を当て、聖書学者の山口里子氏をお招きし講演をいただいた。参加者は約八〇名。以下は、講演内容の概略である。

講演では最初に、キリスト教とジェンダーの関係について歴史的な振り返りがなされた。紀元一世紀のイエスの伝道活動と、それを継承した最初のクリスチャンたちの活動がジェンダーとの関係で紹介された。中世に遡ると、父権制的な社会

と教会は、ジェンダーに関して一体化した権力機構になり、女性たちは尊厳も主体性も奪われて忍耐と服従の人生に閉じ込められていた。枠を外れた女性たちは処刑の対象にさえなった。しかし、こうした暗黒の時代の中でも、民衆の中で様々な知恵を用いた抵抗の流れが完全に絶えることがなかった。二〇世紀後期には、「解放の神学」が登場し、多様性を肯定する初期のキリスト教のビジョンが活性化された。

次に、「同性愛」と「同性間性愛」についての用語の説明がなされ、古代の人々にとっでは、現代語である「同性愛」とは区別して、「同性間性愛」という言葉を使うほうが適切であることが指摘された。続いて、この用語概念を基にして、キリスト教の中で「同性愛は罪」という主張の根拠にされてきたテキストが複数紹介

された。山口氏は、「それらのどの一つも同性愛は罪という主張の根拠にはできないというのが、私の結論です。」とした。これらのテキストの中でも、同性愛否定や同性愛者差別・断罪に最も多く利用されてきたロマ書（ローマの人々への手紙 1:26-27）のテキストを取り上げ、用語およびテキスト分析がなされた。難解なテキストであることを前置きとしながら、原語のギリシャ語の言葉使いに出来る限り近い形で翻訳された私訳テキストが、以下のように紹介された。

(二六節) このゆえに、彼等を、神は、不名誉な熱情に任せられました。  
なぜなら、彼等の女たちは、自然な使用を、反自然なものに交換しました。  
(二七節) 同様に、男たちも、自然な使用、女たちの、を捨

てました。

互いへの欲情の中に燃やされて、男たちと男たちの中で恥を行ないぬいて、

彼等の誤りに当然の報いを、自分たち自身に受けとつています (ロマ 1:26-27)。

古代の父権制社会において、「男性」(アネール・ane)・「女性」(グネー・gune)という言葉は、基本的に「家父長」と「妻」というような一定の身分を持つ人々を指して使われているのに対して、このテキストに書かれた「女」(セールス・theus)・「男」(アルセーン・arsen)が性別の用語「メス」・「オス」であること。またこのテキストの周辺にも頻繁に登場する熱望(エピスマリア二四節)、熱情(パソス二二六節)、欲情(オレクセイ二二七節)は全て、古代のギリシヤ哲学で「反自然」(二六節)の「誤り」(プラネー二二七節)として否定される感情を指す表現である。

ること。「自然な使用」の「使用」

が性的な意味で用いられると、(誰かを性的に使用する事としての)「性行為」を指すことになること。当時男性は、自分が所有する物を理性的に有効に「使用」し楽しむことが勧め

られたこと。日常生活に関わる全ての事柄において、「熱情」(パッション)を排除して、所有物に心を奪われることなく、冷静に「無関心」(アディアフォラ)に、自分の所有物を有効に「使用」すること。これらが、理性的で支配者にふさわしい男性であった。本来理性的な存在である男性にふさわしい「自然」な性行為は、冷静で無関心に、支配者として相手を「使用」することであった。またその際、「使用」の対象になる人の身体的な性別には区別がなかった。相手が「男」であろうと「女」であろうと、自分の所有物を有効かつ冷静に「使用」するのは、支配者として

の「男性」にふさわしい行為であった。山口氏は、この箇所パウロが、「彼等の」女

も男も、神から与えられた「自然」な性的「使用」を「反自然」な性的「使用」に「交換」して、「欲情」の中に「燃やされて」いると、断罪している

ことを明らかにし、「同性間の性愛」を断罪しているのではないことを、明解に指摘した。またパウロのこの記述には古代ギリシヤ哲学及びヘブル語聖書のレビ記の影響があることを解説した。ヘレニズム時代に続く支配的エリート男性たちの哲学的な文書によれば、神から与えられた「自然」な性行為の概念において鍵となる重要なことは、熱情の制御、「無関心」による自制的な、所有物の「使用」であった。この理解において、「男」と「男」の間で行なわれる性行為は、「男性」が支配者として自分の下位にいる奴隷の「男」や

若い「男の子」を、「下位・受容者」として使う限りにおいて「自然な性行為」であった。

レビ記からの影響としては、レビ記18:22と20:13を取り上げ、この箇所では単純に「男と男と一緒に寝てはならない」とは書かれていないこと。ここで語りかけられているのは、

家父長の身分を持つ男性が性行為で相手の男に「女性」の役割、すなわち「服従者・受容者」という男にとって恥ずべき役割を担わせて、「男でない男」にさせてはならないことを勧めている。当時の「性別」には、現代の私たちが考えるような「身体的性別」の他に、もう一つ、「身分的性別」という理解があった。レビ記では、「男性」に対して、相手の身分がどうであろうと、「身体的性別」が「男」である者に、「女性」の性別役割を担わせてはならないと命じている。山口氏はパウロがこの理解を共有して

いたことを指摘した上で、パウロが断罪しているのは、男

と女の「異性間性行為」の対極に置かれる「同性間性行為」とは言えないことを指摘した。

このテキストで断罪されない正しい性行為は、父権制的な性別役割に則して、「男」が「支配者」として「女」を「服従者」にして感情を高ぶらせず無関心に「使用」する性行為のみであり、この形を取らない性行為は全て、異性間の性行為であっても、神の秩序に反する「反自然な」性行為として断罪されていることを説明した。最後に、山口氏はパウロが一世紀の中頃(五〇年代)にガラテヤの諸教会に宛てた手紙の中で引用(下記)を紹介し、最初の「洗礼定式」が包含的平等主義の宣言になっていることを指摘した。そしてキリスト教は本来、性の多様性を肯定していたことを強調した。あなたがたは皆、神の子た

ちです。なぜなら、キリストの  
中へと洗礼を受けた人たちは  
皆、キリストを着たのです。  
ユダヤ人もギリシヤ人もあり  
ません。奴隷も自由人もあり  
ません。男と女もありません。  
なぜならあなたがたは皆、一  
人だからです（ガラ3：26）  
28）。

（文責 山本 俊正）

RCCミニフォーラム報告 二〇一六年二月一日

## 「戦争体験」と「戦争の現実」

講師 ローリー・ファニング アフガニスタン帰還兵  
マイク・ヘインズ イラク帰還兵

今回の企画は、退役軍人らで  
つくる米国の平和団体「ベテラ  
ンズ・フォー・ピース (Veterans  
For Peace=VFP)」が一月に

日本でのスピーキングツアー  
を実施しており、アフガニスタ  
ンとイラクで戦争を実際に体  
験した来日中のローリー・ファ  
ニング氏とマイク・ヘインズ  
氏、コーディネーター兼通訳  
のレイチェル・クラーク氏を  
関学に招き、実現した。二人  
は自らの従軍した体験談をビ  
デオやスライドを交えて語り、  
武力や戦争によって平和を实

では、「逆らわない人間」とな  
ることが教育され、自らが「高  
価な道具」に作り変えられて  
いくことを経験する。アフガ  
ニスタンに派遣されて、最初  
に目にしたのは、人々の貧困、  
崩壊した建物の跡、ロシア軍の  
残した戦車などであった。軍  
からの至上命令は「ピンラディ  
ンを探せ」であった。命令遂行  
のためには、何でもした。米  
軍基地がないので、小学校を  
基地として没収した。子ども  
たちは無期限で学校に行けな  
くなった。

情報収集のために、怪しい  
人物を二人一組で連行し、隣  
合わせの別々の部屋に座らせ、  
片方の部屋で銃声を響かせ恐  
怖を与え、尋問を行った。ま  
た、大金をアタッシュケース  
に詰め込み、それらをちらつ  
かせながら、怪しい人物の通  
報を奨励した。隣人を裏切る  
ことに懸賞金を賭け、情報収  
集を進めた。また情報収集の

ためには法的手続きを踏まず、  
拷問も日常茶飯事として行わ  
れていた。ファニング氏はア  
フガニスタンで行われた「テ  
ロへの戦い」の犠牲者の八割  
が一般市民であったことを指  
摘し、9/11の同時多発テロ  
で「このようなことを二度と  
起こしてはならない」と入隊  
したが、自らがテロに加担す  
ることになった苦悩を告白し  
た。特殊部隊に所属した者が  
戦争反対論者になり、途中で  
退役するケースは珍しい。ファ  
ニング氏の場合、様々な煩雜  
な手続きを経て、軍の中の審  
問などが続き、除隊までに六ヶ  
月を要した。

ファニング氏は最後に、過  
去の自爆テロの件数を示し、  
二〇〇一年以降、反米目的の  
自爆テロが全体の九〇%以上  
になっていることを指摘した。  
また米国が世界に展開してい  
る米軍基地は六八八箇所にあ  
り、どの国家よりも多いこと。

そして、米軍基地が表では、  
自由と民主主義を守る若とさ  
れる一方、裏では天然資源の  
搾取、特にアフリカ五カ国  
中四カ国にある基地は、世  
界最大の二酸化炭素排出機関  
となつていることを指摘した。

マイク・ヘインズ氏は海兵隊

偵察部隊として、二〇〇三年  
にイラクに派遣された。また  
沖繩にも海兵隊員として駐在  
した経験がある。ヘインズ氏  
はスピーチの冒頭で広島、長  
崎への原爆投下、東京・神戸・  
大阪大空襲、沖繩戦などに触  
れ、米国人として心からの謝罪  
を表明した。また、第二次世  
界大戦以降、日本が七一年以  
上、戦争をしなかったことの  
大きな要因に憲法九条の存在  
があったことを指摘した上で、  
現在進行中の南スーダンへの  
「駆けつけ警護」の実体化、ア

フリカ、ジブチの自衛隊による基地所有などによって、憲法九条が空洞化する危険性を指摘した。また、自らも沖縄での抗議行動に非暴力で参加した経験を紹介し、「平和の文化」を構築することの大切さを強調した。「平和の文化」とは対照的に米国では、愛国主義が生活のあらゆる場面に浸透しており、小さい子どもの頃から米国が他国より優れていること、軍隊が良いものであることが、刷り込まれている実体についても説明がなされた。「G・I・ジョー」と呼ばれる地上最強の特殊部隊を描いた大人気のテレビ・アニメ番組、映画「ランボー」、「キャプテン・アメリカ」等々、数え上げたら切りがないほどの数に及ぶ。また、米国ではスポーツ、ゲーム、等のイベントでは必ず国歌が斉唱され、軍隊が登場する場合もある。ヘインズ氏は、軍隊が主催する航空ショー(Air Show)に、多くの子どもたちが集まる様子をスライドで紹介し、相手に銃を向けて笑っている子どもの写真、迷彩色のフェイスマイクを顔に塗り、喜ぶ子どもの姿を映し出した。イラクに派遣された時、大量破壊兵器が存在しなかったこと、六〇%以上の情報の間違っていること、一般家庭に侵入し、罪のない若者を連行し収容所に隔離したこと、を語った。イラクから帰還した後も、連行した家族の中において連行の様子を見ていた、六〇七才ぐらいの少女の悲鳴が繰り返し聞こえることがあったという。また、多くのイラクに派遣された軍人は、子どもの悲鳴や残酷な風景のフラッシュバックに襲われる、PTSD (Post Traumatic Stress Disorder、心的外傷後ストレス障害) に苦しんでいることが報告された。ヘインズ氏自身も、「テロリズムと戦う

ためにイラクに従軍したのに、自らがテロリストとなってしまったことへの後悔と押さえようのない怒りがこみ上げてくる。前向きになるまでに一〇年が必要であった」と振り返った。ヘインズ氏は、イラクから帰還後ベテランズ・フォー・ピースで活動するかたわら、水耕栽培事業に取り組んでいる。米国のテレビ局CNNによるヘインズ氏へのインタビューと水耕栽培事業に取り組む姿の映像が紹介された。ヘインズ氏は「死、痛み、破壊から、いのちを育む創造的な平和の文化、そのモデル」を作り出すことの大切さを強調し、話しを結んだ。

なお、今回のミニフォーラ参加者総数は約三〇〇名、内学生が約二〇〇名、一般参加者が約一〇〇名であった。

(文責 山本 俊正)

RCCキリスト教講座 二〇一六年度秋学期

## 「使徒言行録を読みましよう」

大宮 有博 法学部教授・宗教主事

私は、例の九・一一の事件をはさんで五年半、アメリカで暮らしました。アメリカの教会は、一九九〇年代から三〇年近くにわたって、セクシャルマイノリティを生きる人々が自らのアイデンティティを隠さずに教会に属することができるといふことをめぐって議論しました。その前の三〇年は、キリスト者が人種やエスニシティを超えて希望を共にすることができると、そして同じ場所で祈ることができるとかをめぐって議論しました。日本でも同様の議論が行われてきました。

使徒言行録を読むと、教会は生まれた当初から「誰ととも」にどんなコミュニティをつくるか」をめぐって激しく議論をしてきたことが分かります。そして、その議論の答えを出すヒントは、「神は差別されない」(使一〇・三四)というペトロの宣言にあると思います。使徒言行録は、宣教が停滞したり、教会の議論が行き詰まったりするたびに、そのような状況を突破するために読まれるべき書物です。

教会に属さない人にとっても、「私たちは誰ととも」にどんなコミュニティをつくるか」という問いは、地域や社会の問題を考える時にしばしば提起されます。使徒言行録は、そういう問題提起に込める書物でもあると思います。

講座の第一回目では、使徒言行録のエルサレム共同体に

ついでの記事(使一章〜七章)を読みました。エルサレムのキリスト者は当初から、「財産や持ち物を売り、おの必要に応じて分け合う」ことで、「もはや貧しい人が一人もない」共同体を目指しました。かれらが目指したものは、出エジプト物語の示す理想の共同体の復興でした。

第二回目では、フィリポによる伝道についての記事(使八章)を読みました。いよいよ福音はエチオピア人やサマリア人に伝えられました。(キリストを信じる)ユダヤ人は、イエスが救い主であると信じた人々を、民族の境界を越えて、同じキリスト者とすることに躊躇しました。しかし、その躊躇を突破する力が聖霊でした。使徒言行録の物語では、聖霊が後押しした宣教によって、福音があらゆる人々に伝えられることが描かれています。第三回では、異邦人伝道の

開始とエルサレム会議に関する記事(使一〇、一一、一五章)を読みました。ペトロが夢の中に見た様々な動物が乗る布は、ユダヤの清めの法の「分け隔て」を乗り越えた教会の姿を象徴しています(使一〇章)。

第四回ではパウロによる「地の果て」を目指した宣教についてお話をしました。パウロは熱心な宣教活動を行いました。多教ご参加いただいた受講生の皆さんの熱意に支えられて、四回の講座を終えることができましたことを感謝します。

## ■ RCC 研究プロジェクト 「キリスト教と現代思想」

研究代表者

柳澤

田実

神学部准教授

二〇一五年から開始した本プロジェクトは、「キリスト教と文化」を研究するという本ゼンターのテーマを踏まえ、特に二〇世紀における現代思想とキリスト教との関係について明らかにすることを目指したものである。この二年間に開催された研究会は三回にとどまったが、それぞれ充実し

た発表をいただいたことに感謝したい。佐藤啓介氏(南山大学)からは全体的な思想史的位置づけを示していただき、文献の紹介を通して基礎的な情報の共有を図ることができた。また岡崎乾二郎氏(武蔵野美術大学)の講演では、二〇世紀の美術や建築とキリスト教との交わりとが興味深く示

された。さらに加納和寛氏(本学神学部)からは経緯論をめぐる二〇世紀のプロテスタント神学/カトリック神学の論争という重要な内容を紹介いただいた。

これらの研究会を通して、この課題の重要性とさらなる議論の深まりが必要であることを痛感している。本プロジェクトはいったん終了するが、今後も同様の関心を持つ方々による深化が進められること



## ■ RCC 研究プロジェクト 「日本における礼拝のインカルチュレーション」報告

研究代表者

中道

基夫

神学部教授

日本に伝えられたキリスト教の言語(主として英語)が、日本の文化の中で冠婚葬祭を含む礼拝や諸式の中で使われる中で、どのように日本語・文化と結びつき変容してきたのかを研究することがテーマです。このテーマに関して、礼

拝学、賛美歌学、社会学、言語学のアプローチによって解明しようとしています。この研究によって、欧米のキリスト教から解放され、日本文化の中で開花したキリスト教を、積極的に、かつ批判的に評価分析できると思われます。

## RCC 研究プロジェクト

## 「キリスト教主義教育の展開」

—キリスト教主義学校における宗教リテラシーのあり方をめぐって—

研究代表者 舟木 讓 経済学部教授

本プロジェクトは、二〇一五年度、「合理的配慮」という概念の誕生とも関係のある「宗教リテラシー」に関する研究とともに、特に「グローバル化」が進展する世界や高等教育機関における実際的な展開に関してフィールドワーク等を通じてその可能性を探ることを目的として発足しました。初年度は、小原克博氏（同志社大学神学部教授）をお招きして「キリスト教とイスラム教の対話」と題したご講演を



いただき、特にイスラームに関する知識の整理と共にその現状を確認するとともに、本学学生らにこのことを理解する重要性を啓発することとなりました。また大宮有博氏（本学法学部教授・宗教主事、ご講演時は名古屋学院大学准教授）を招いて、「実験動物感謝式—名古屋学院での実例から—」と題したご講演と共に、実際の感謝式の再現を行っていたいただき、新しい視点からの「宗教リテラシー」の問題提議を行っていただきました。そうしたことを受けて、二〇一五年度、二〇一六年度は本学における「宗教リテラシー」のあり方を関係部局との情報交換や、今後の具体的な設備・組織等についての話し合いを開始しております。

具体的には、現在ムスリム学

生への「祈りの場」、として一時的に提供している部屋に代わる恒常的な「祈りの場」を本学G号館地下に新たに設置された学生生活動のための貸し教室を利用する可能性について話し合いを続けております。また「実験動物」に対する「感謝式」的な式典の実施に関しては、前川裕RCC主任研究員（本学理工学部専任講師・宗教主事）らが当該学部との調整にあたり、本学らしいあり方を模索しております。

また、前川主任研究員が本年度実施されたフィールド・ワークを通じて得られた結果を「キリスト教主義大学における他宗教対応への取り組み事例—主にイスラム教への対応について—」と題した本プロジェクト研究会（二〇一七年二月十日）で発表し意見の交換を行うことができました。

世界が急速に多様性に対する寛容を喪失しつつある今日、特にキリスト教主義というひとつの宗教的理念のもとに創

立されている本学が常に向き合う課題として「宗教リテラシー」という主題は恒常的な研究課題であると思われ、さらなる研究とその実践に向けての取り組みを行う必要性を改めて確認しなければならぬと感じております。

## ■ 畠山保男教授が定年退職

キリスト教と文化研究センター所属の畠山保男教授（学長直属）は、二〇一七年三月三十一日をもって定年を迎えられます。

同氏は一九七六年関西外国語大学を卒業され、同年四月に同志社大学大学院神学科修士課程に入学された。一九七八年同大学院にて神学修士を取得後、同大学院博士課程に進まれた。一九七九年にはイス・バーゼル大学神学部留学し、一九八八年同大学で神学博士号 (D.theol.) を取得さ

れた。その後一九八八年、明治学院大学神学部専任講師、一九九〇年同大学一般教育学部助教授、一九九二年同大学キリスト教研究所主任などを経て、二〇〇〇年聖和大学人文学部キリスト教学科教授に就任された。二〇〇九年、学校法人関西学院との法人合併により、学長直属教授として関西学院大学キリスト教と文化研究センターに所属となられた。日本基督教学会会員、日本バルト協会会員、日本組織神学会会員、神戸ユダヤ文化研究会会員、関西バルト・ボン・ヘッファー研究会会員、日本ユダヤ学会会員、京都ユダヤ思想学会会員。『人を活かす戒め—共生をめざすキリスト教—』ほか著書・論文多数。

## 編集後記



RCCは設立二〇年を迎えた。過去の蓄積とともに新しい活動に挑戦するセンターへのご支援をお願いする。(M)